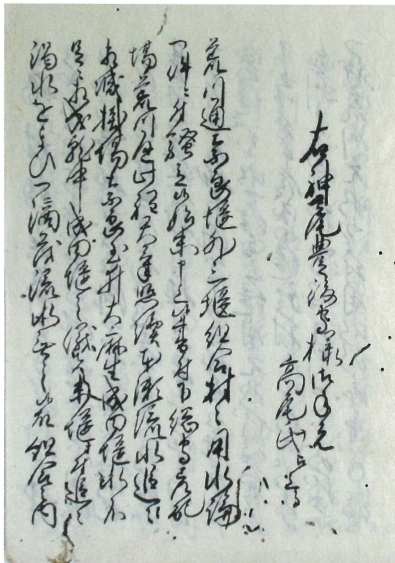


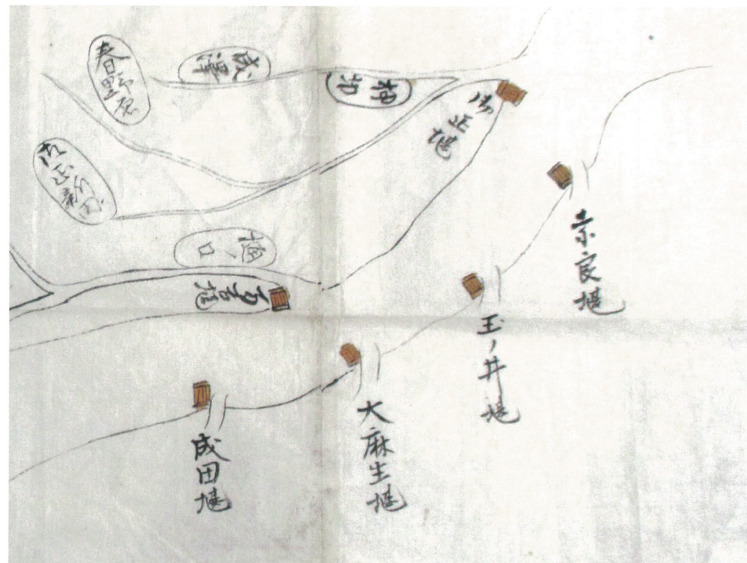
六堰用水

荒川から取水し、熊谷宿近隣の村々を灌漑する用水路の総称です。奈良堰用水、御正堰用水、玉井堰用水、大麻生堰用水、吉見(万吉)堰用水、成田堰用水の6つの堰、用水路からなり、慶長年間(1596～1615)に關東郡代伊奈備前守忠次によって順次開削、整備されました。

当時、荒川の水量は天候により増減が激しく、安定した取水は困難でした。そのため、水が不足した年には、水を確保するために取水口を上流に移動したり、下流の堰に水を送るために上流の堰を閉める取決めを破ったりと、それぞれの用水組合の村々の間で水争いが絶えませんでした。



「荒川通奈良堰用水論一件二付差出候案文写」
天保8年(1837)8月 青木家文書6872



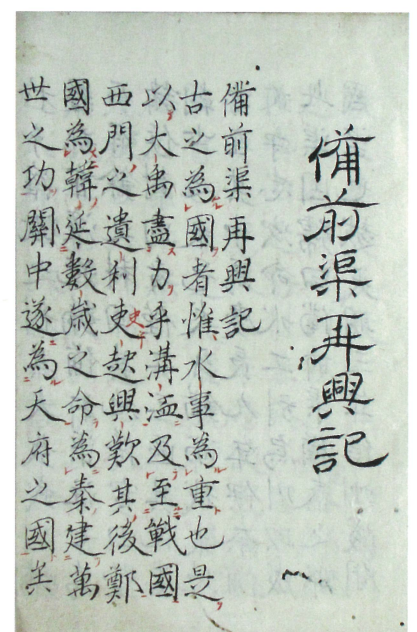
六堰の取水口(根岸家文書3594、上側が南)

天保8年、水不足により奈良堰、玉井堰、大麻生堰、成田堰の間で水論が起こると、交渉の結果最下流の成田堰に配水するために他の3堰を閉切る決定がなされました。しかし、決定が伝わらなかった玉井村の農民たちが堰を閉められたことに怒り、大騒動に発展しました。

備前渠用水

烏川右岸の二手堰(現本庄市)から取水し、弥藤吾村(現熊谷市)で福川に合流する用水で、慶長9年(1604)、伊奈忠次によって開削されました。これにより幡羅領、深谷領、忍領、羽生領で広大な新田開発がすすめられました。しかし、天明3年(1783)の浅間山噴火により土砂が堆積したことを原因に上流で洪水が頻発したため、寛政5年(1793)に取水口が閉切られました。

その後、利根川の水位の低下により周辺の村々の水不足が深刻化したため、下奈良村の吉田市右衛門や羽生領町場村(現羽生市)の名主清水弥右衛門の資金援助と組合村々の努力によって文政11年(1828)に再び取水口が開かれました。

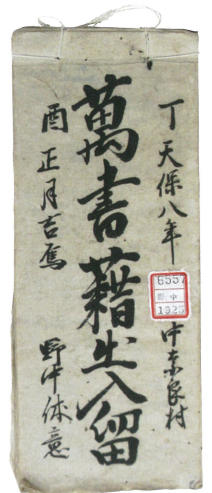
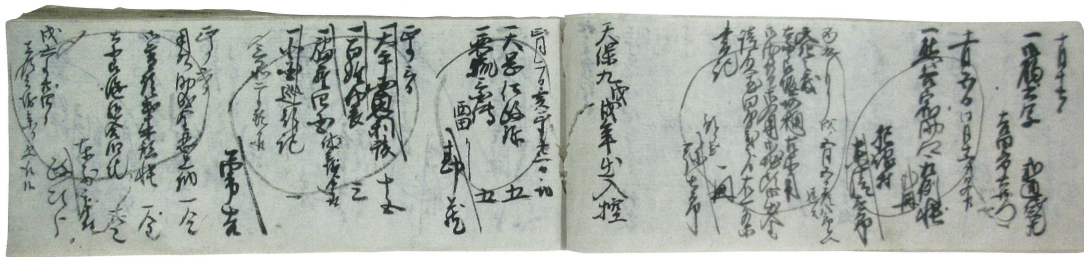


備前渠再興記

天保9年(1838)4月 青木家文書27

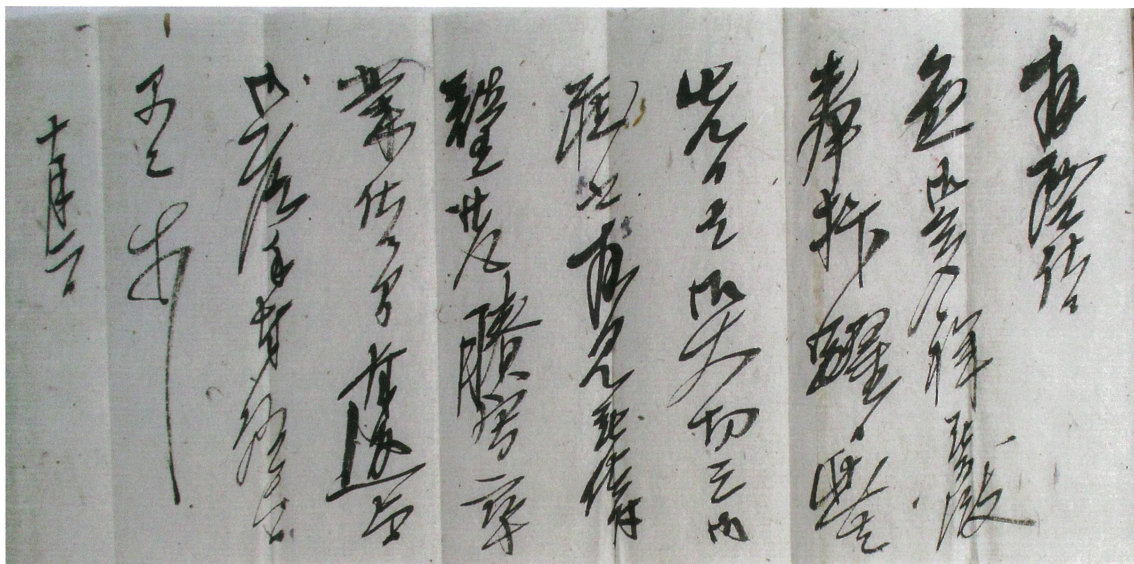
Ⅲ.名主たちの交遊と情報の流通

地域の名主たちは、村の維持のためにさまざまな情報を収集、整理していました。それは、典籍や文書の貸し借りという形で行なわれていました。この地域では、江戸時代後期から明治初期にかけて中奈良村の野中家をはじめとして、吉田市右衛門や上川上村の名主八木原三郎右衛門らが盛んに文書の貸し借りを行っていたことがうかがえます。こうした活動は文政期(1818~1830)前後より始まったとされています。この時期は、改革組合村の編成の原因となった治安の悪化や、水争いが増加した時期と重なります。地域の秩序が危機的な状況に向かいつつある中で、記録や情報を収集し、管理することの重要性が認識され、活発な交流へとつながりました。



「万書籍出入留」
天保8年(1837) 野中家文書1925

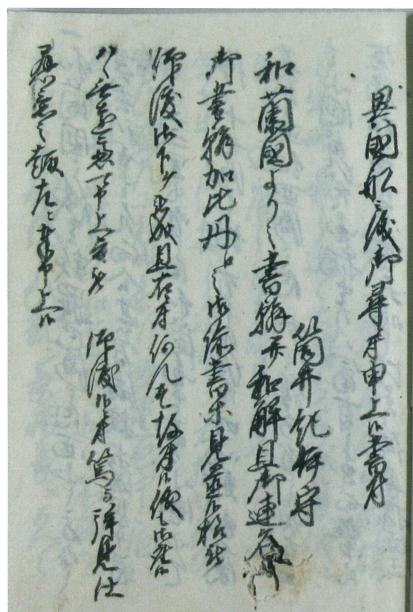
天保5年(1834)から同12年にわたる野中家の典籍や文書の貸出し記録。その内訳は、『太平記』などの娯楽本から飢饉や災害の記録、六堰関係文書と多岐にわたります。とくに用水関係のものが多いから、同時代に地域で頻発する水論に高い関心が集まっていたことがうかがえます。



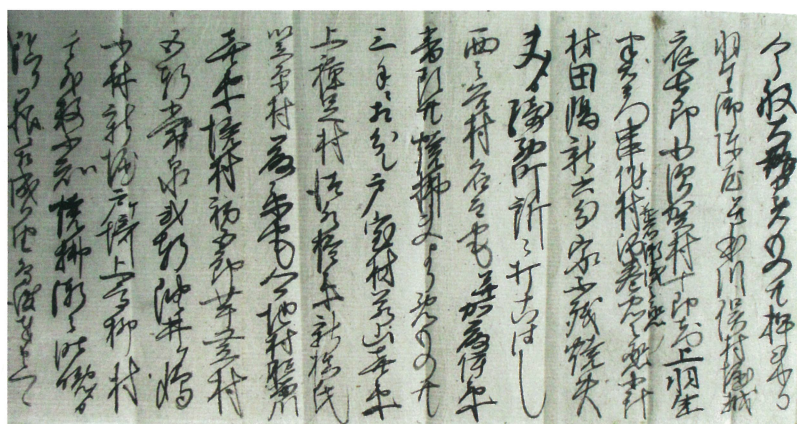
青木丑五郎宛吉田市十郎書状
明治時代初期 青木家文書4008

「御大切之御蔵書拜見被仰付難有仕合謄写卒業仕候間奉返上候」とあり、借用した文書や典籍は写して利用、保管していたことがわかります。

異国船の来航という大事件にはじまる幕末の動乱は、農村にも大きな衝撃を与えました。こうした異国船や江戸湾警備の情報、和宮降嫁の行列、関東に迫りくる官軍の動向などは、旗本や忍藩を領主とするこの地域の農村にとって生活の存続に関わる大問題として認識されていました。当時の記録からは、名主たちは、村のリーダーとして様々な方面から情報を集めていたことがわかります。



「異国船渡米二付非常海辺守備秘書」
幕末期 野中家文書2942



「大勢悪もの共押来り羽生御陣屋他焼失二付書状」
慶応4年(1868) 青木家文書5161

こうした情報収集の前提となっていたのは、名主たちの交流でした。彼らは公務の他にも縁戚関係や学問、俳諧などの文芸活動により広範囲にわたってネットワークを形成していました。名主たち自身が明野栄章ら熊谷の代表的な和算家の門人となっていたり、村の人々と俳句のやりとりをしていた記録が残っています。

縁戚関係では、例えば吉田市右衛門は、幕末にパリへ渡ったことで知られる清水卯三郎の実家である羽生領町場村の名主清水家と縁戚関係にあり、清水家は甲山村(現熊谷市)の豪農根岸友山とも縁戚でした。また、青木丑五郎も子の定四郎を渋沢栄一の従兄弟で下手計村(現深谷市)の名主尾高惇忠家へ養子に出しています。さらに、定四郎は番匠村(現ときがわ町)の医師小室家の娘を後妻に迎えるなど、広範囲な関係を形成していたことがわかります。



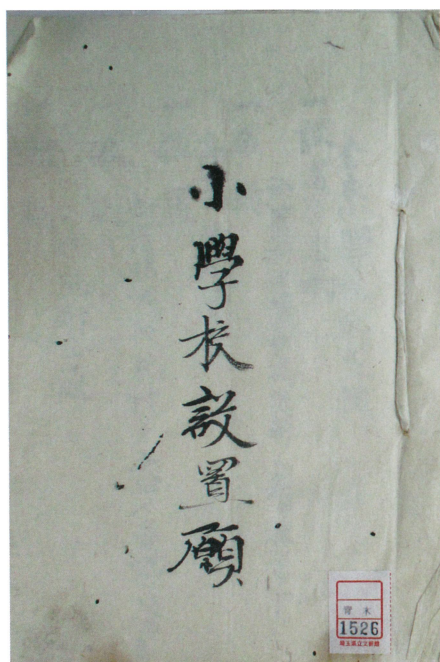
尾高惇忠写真 青木家文書8927

巻間に流布する惇忠の写真とはわずかにポーズが異なる。

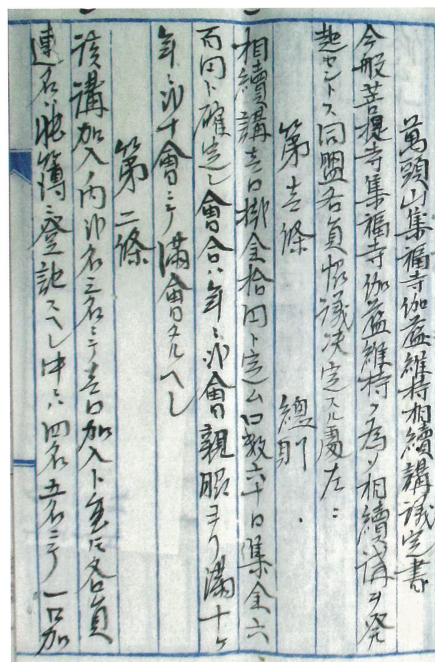
IV.地域の近代化を目指して

村の運営や学問、俳諧などの交流を通じて政治的、社会的知見を高めた名主たちの一部は、幕末の動乱のなかで「草莽の志士」として尊皇攘夷運動に参加していきました。一方で、困窮した地域の問題に向きあい、村の再生や地域の近代化に積極的に取り組んでいく人々も多くいました。

この地域で名主を務めた者の多くは、開国、近代化によってもたらされる新たな情報、知識を取り入れながら、用水や教育など近世以来の地域の課題解決に挑み、維新後も優れた指導者となっていきました。彼らは家の経営の多角化と地域の近代化に努め、あるいは活動範囲を広げて政治や実業の分野へ進出していきました。



「小学校設置願」
明治時代 青木家文書1526



「万頭山集福寺伽藍維持相続講議定書」
明治17年(1884) 青木家文書171-3

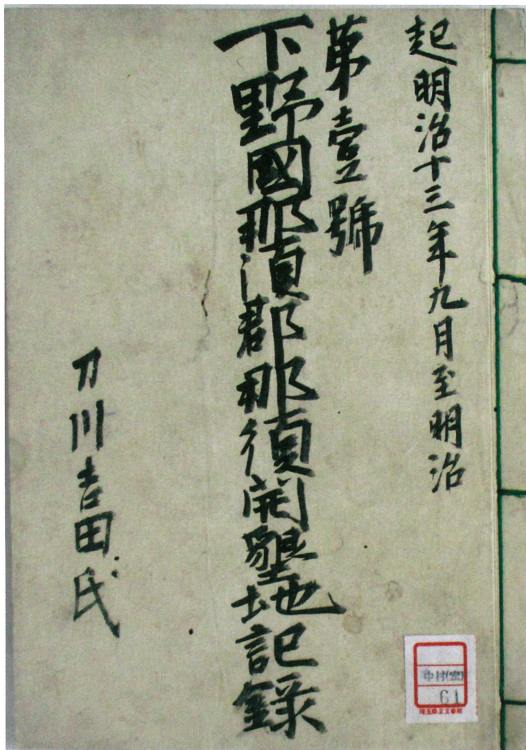
青木丑五郎が下奈良村の有力者たちは、村内の集福寺で明治5年(1872)に吉田市十郎が開校した奈良学校の運営に尽力しました。この奈良学校は、周辺の村々を学区としていました。一方で、広く周辺地域の檀那寺となっている集福寺伽藍の荒廃を憂い、明治維新で財源を失った社寺の維持方法を模索しました。彼らは教育の普及や社寺の保護を通して、村の再生と発展を目指していました。

「中村孫兵衛外六名・七名社々員記念写真」
明治40年(1907)10月20日 中村(宏)家文書254

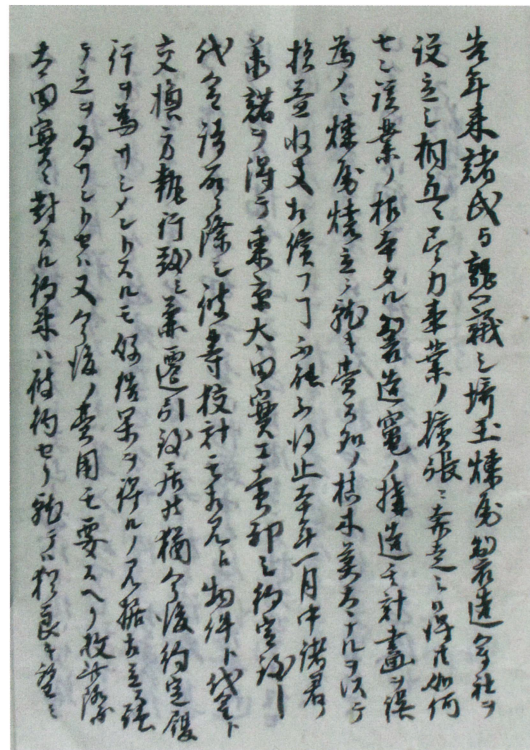
明治8年(1875)、上中条村の組頭だった中村孫兵衛(後列左端)は、上川上村の稲村貫一郎(前列中央)や中奈良村の石坂金一郎(同右端)、玉井村の鯨井勘衛(同左端)らとともに熊谷宿本陣の石川弥一郎(後列右端)の呼びかけで七名社という結社を結成します。彼らは熊谷周辺を拠点に演説会を開き、政治論や教育論を議論しました。

また、青木丑五郎は西洋思想に関する書物を収集して石坂や森茂三郎ら七名社同人に貸出したり、娘婿で七名社に加わる蓮沼村(現深谷市)の塚田啓太郎と政治や教育について意見を交わしています。七名社をはじめとして、政治や教育の問題が地域で高い関心を持たれていたことがうかがえます。





「下野国那須郡那須開墾地記録 第壹号」
明治13年(1880) 中村(宏)家文書61



「埼玉煉瓦会社創立規則他綴」
明治21年(1888) 青木家文書2229

中村孫兵衛らは実業の道へも進み、吉田市十郎らとともに栃木県那須野ヶ原の土地払い下げを受け、大規模な開拓事業に着手しました。その後彼らの多くは国や県の官僚や郡長となっていきます。
また地元でも、名主たちの主導で煉瓦会社や鉄道の敷設、中学校の設置などが計画されました。これらの多くは熊谷町をはじめとする県下の有力者や大商人も関わって進められ、地元の村々から視野を広げ、県北の中心地としての熊谷の発展を目指していたことがわかります。

エピローグ

中山道熊谷宿の北東に広がる中条・奈良地区一帯には、かつてこの地域の農村の教育や文化の発展のために尽力し、多くの記録を残した人々がいました。その後、彼らはこの地域を基盤とし、熊谷の近代化に貢献し、現代につながる礎を築いていきました。

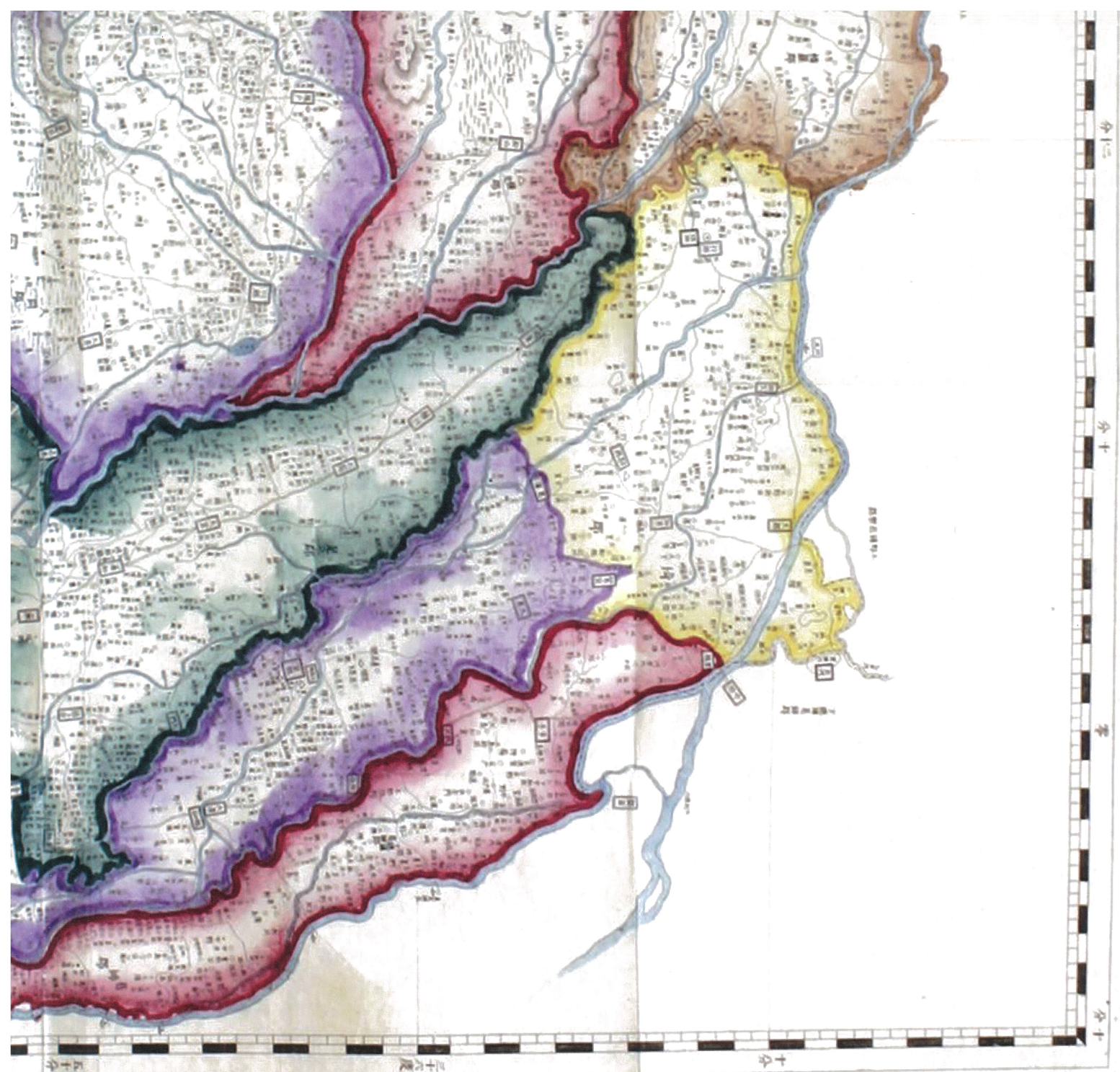
時代が下った昭和63年(1988)、この歴史ある地域を舞台にさいたま博覧会が開催されました。その後、会場敷地はスポーツ文化公園として整備されました。中心施設として建設されたラグビー場は今回のワールドカップ開催へとつながり、この地域の新たな歴史的一幕となっていきます。

埼玉県立文書館開館50周年&リニューアル記念企画展
「熊谷の記録と文化-RWCの地を訪れる-」
展示解説リーフレット

編集・発行●埼玉県立文書館
〒330-0063
埼玉県さいたま市浦和区高砂4-3-18
電話番号 048-865-0112

発行日●令和元年(2019)9月10日

印刷・製本●関東図書株式会社



令和元年度に文書館で開催される4回分の企画展リーフレットを集めると、裏表紙に1枚の地図が現れます。
さて、どのような地図でしょうか。

第1回 「埼玉の“ふみくら”-古文書で日本の歴史を見る-」

6月25日(火) ~9月1日(日)

第2回 「熊谷の記録と文化-RWCの地を訪れる-」

9月10日(火) ~12月8日(日)

第3回 「鉄道の埼玉-明治から現代へ-」

1月14日(火) ~3月8日(日)

第4回 「生活に役立つ地図」

3月17日(火) ~5月17日(日)